



さて、未明に目が覚めると寒い、それもそのはず自分はボートの中で眠っていた。わたしはボートをこいで岸にもどり、テントで寝直したが、眠りに落ちたのもつかの間、大きなヒステリックな声に目を覚まされた。

いさかいの音が聞こえてくる。テントの蚊よけネット越しにのぞいてみたが、声の主の姿は見えない。声音からどうやらイノシシの夫婦だということがわかる。朝っぱらから夫婦喧嘩のようだ。それにしてもまだお日様は姿を見せていないのに、参ったなあ、と思った。毎朝こうだともうここではテント泊はできないなとも。

夫婦喧嘩ではたいていそうであるようにかみさんのほうが優勢だ。それは彼女の強圧的なヒステリックな声だけでなく、だんなの「大きな声を出すなよ、まわりに聞こえたら恥ずかしいじゃないか」といういさめの語調からもうかがえる。

「恥ずかしいようなことをしているのは、誰だい。みんなに聞こえて恥になるのはあんたのほうだけだよ。」

「うりぼうたちが目を覚ます。あの子らに聞かれるとまずい。」

そのとき、雌イノシシはいきなりかみついたらしく、だんなは「あいたっ！なんてことをする！グルル」と鼻息を響かせて叫んだ。すると「この浮気者、恥を知れ！もう帰ってくるな。牝ブタと豚小屋で一生暮らしゃあがれ。この女たらしが！」というヒステリックな声が森をこだました。

静かになったと思うと、イノシシのヴルが湖畔に現れた。初めはその強いにおいで気づき。やがて足音が聞こえ、鼻息が聞こえ、そして木々の間からヴルの姿が現れた。私はこの森ではイノシシが一番危険だということをフクスケやおっさんから聞いていたので身構えた。特にこのヴルは大の人間嫌いだという。私はいざというときはテントから飛び出して、ボートに飛び乗って沖に行けば安全だと思った。

しかしその必要はなかった。ヴルのほうから丁重に声を掛けてきた。「ひろしさんとやら、朝っぱらから騒いで申し訳なかったな。目を覚まされたでしょう、せっかくの湖畔の朝なのに」

「あっ、いえ、そちらさんこそ朝からかみさんにひどいことを言われていたようで、同情いたします」

「いや、全部わしが悪いんでさあ」

しばらく沈黙が続いた。私はまだ酒気帯びの状態、このイノシシにそれを気づかれて暴れられはしないかと心配した。なぜそう思ったかはわからない。とにかくまだテントに潜んでいることにした。

「フクちゃんから聞いたけど、動物がお好きなんだってね。・・・ひとつその動物愛に免じてものを頼まれてくれないかい、ひろしさん」ヴルが言った。

この「動物愛に免じてものを頼まれてくれないか」は言い回しがおかしいと思ったが意味はわかった。フクスケやおっさんから聞いていたヴルとはうってかわって丁寧な口調だ。あの夫婦喧嘩のせいだと思

った。あんなにこっぴどくやられたらだれでもしよげるであろう。

私はテントから出た。

「なんでしょう？動物は好きですが、それは食べるのが好きという意味も含まれています」

ヴルは荒い鼻息をした。ジョークを言ったつもりだが、我ながらなんというあさはかなブラックジョークだったろうとすぐに気づき、あわてて「頼みというのは何でしょう？お聞きしましょう」と注意を逸らした。まだ酔いがさめていないのだと思った。

ヴルはやはりおかしな言い回しで話を始めたが、整理すると次のようなことを言った。

彼は、夜な夜な人里にゆき、養豚所の垣根を飛び越えて豚たちの間に飛び込み、ブタのえさを横取りして腹ごしらえをすると、雌ブタと交渉を始める。従わないメスや攻撃してくるオスにはするどい牙で齧って邪魔をさせない。初めは騒動に気づいた犬が吠えたてて、やがて飼い主がやってくるので、あわてて逃げ出していたが、あるときから事情が変わった。

飼育者らはなぜか夜は犬を豚小屋から遠ざけ、あたかもイノシシの夜這いを歓迎しているかのようになった。そして交渉するだけで特に害をくわえるわけでもないイノシシのヴルの進入にブタたちもあまり騒がなくなった。こうして豚小屋はヴルのハーレムとなった。

ヴルはしばらく考え込んでから続けた。

「雌ブタたちのそばにはいつも乳を吸う子ブタたちがたくさんおります。そしてある時、その子豚の中に体に縞（しま）の入ったものたちがいるのに気づいたのです。それが私の子であることはあきらかです。この縞は数ヶ月して消え、茶系統の毛並みを持ちます。そして乳離れした子らは別の囲いに移され、やがて殺されて肉になるのを待つのです。そのうりぼうたちのあどけない瞳をまともに見ると私はいてもたってもいられなくなって、小屋を逃げ出します。許してくれ、このおれがすべて悪い。おまえたちのような不運なイノブタを作った原因は私にある、と自責します。あいつらを救ってあげられなければ私は一生自分を責め続けることになるだろう。私はかみさんからならいくら責められても耐えていける。しかし自分からの責めには逃げ場を失うのだ。どこに行っても私は私を責める私から逃げ失せることはできない。」

猪はここで「ウーグ」と奇妙で異様な声を上げた。その声に自分でもびっくりしたかのように身震いした。

実は私はずいぶん前に、イノブタを食べたことがある。数人の友達と西沢渓谷を上り、その帰りに猪豚料理店に寄って食べた。店に入る前に、その飼育小屋をのぞいてみた。すると男性が餌を手ずから与えており、ぼくらを見つけると餌を差し出して、噛まないからこれを与えてみろという。ぼくは遠慮したが仲間の一人が一握りの餌をイノブタに与えるとぱくりとやられた。ただけがはなかった。

イノブタについて不案内な方々のためにもう少し説明を入れます。えっ味ですか？イノブタの脂の鮮度は高く、食べていると顔がほてってきました。

さて、この男性の話だと、イノブタを得るために、飼育者たちはイノシシの雄とブタの雌を掛け合わせます。この反対も試みられたけど、結果はうまくなかったようです。おそらく雄ブタが荒っぽい雌イノシシに興味を示さなかったのだろうと私は憶測しています。ちなみにイノブタ同士を掛け合わせてみたが、生まれるのはブタだけだということです。

こうしてイノシシを父とした猪豚の飼育と料理が始まった。私の訪れた飼育小屋では種シシはいませんが、野生化していない雄のイノシシを種シシとして飼っている小屋もあるそうです。

さて種シシのいないところでは、雄シシの夜這いを必要とすることとなります。だから、飼育者たちは、豚小屋の囲いを、ブタが逃げないくらいに十分高く、しかし猪がジャンプして飛び込めるくらいのほどよい高さにはしているのです。こうして雌ブタたちはイノブタを産みます。

そしてこのイノブタたちはまだ子供の頃に殺されて食肉にされます。このことがヴルの心を痛めているわけです。

ヴルは言いました。

「自分の子供たちとこの森で遊びながら、ふと豚小屋に入れられた幼いイノブタたちのことを考えると心が痛みます。彼らは囲いに入れられ遊びざかりのころに、食肉にされてしまうのです。その哀れさの原因を作っているのはほかならぬおのれだ。そのおのれは、自分の育てた子供たちとのんきに遊んでいる。母イノシシにじゃれつき、私と走って戯れるここの子たちは何の心配もないだろう。

「それにひきかえ、あのイノブタたちはかわいそうだ。幼心にも、自分たちが大人になる前に屠殺されることを知っているのだろうか。もしそうだとしたら、そのことに恐れをなして眠れない夜を過ごし、眠ったら悪夢にさいなまれていないだろうか。それもおのれの夜遊びのせいだ。そんなとき、自分はまっすぐに湖に向かって走って、飛び込んで死んでしまいたいという衝動に襲われる。ウーグ。

「かみさんにああがみがみいわれていると、ついおとなしいかわいい雌ブタたちのことに気が移ります。あの白いすべすべした肌が無性に恋しくなり、夜になると森を抜けてまた豚小屋に行ってしまうのです。そして鶏の鳴く頃まで飽食と享楽にふけり、帰ってくるとまたかみさんにがみがみやられる。これの繰り返しです。こんなおれは、ブタだ、いやブタ以下だと自己嫌悪に陥ります。」

ヴルはまた重々しく「ウーグ」とうなると、口をつぐんだ。

そのとき日の出となり、そのまぶしい光に湖面は輝き始めた。私はヴルを慰める言葉もなかった。ただ話を聞いてあげることがせいぜいだと思った。

「そこをお願いだ。一生恩に着るから、あのウリボウたちを逃がすのを手伝ってもらえませんか？」ヴルが哀願するように私を見つめて言った。

私の場合それは、犯罪になる。人の財産を盗むのだから、窃盗罪に当たる。しかしその財産が生命であって、ほおっておけば殺されるのであればどうだろう。人間の法律には殺人罪というもっとも重い罪があるが、殺生の対象が食肉用動物や実験用動物ならまったく罪にならない。この格差は本当に許されることなのだろうか？法律で許されても倫理で許されないと思うのだ。ここに動物愛護法というのがどのように関わっているのかは知らない。しかしそれを知るまでもなく、殺されようとするものを救うというのは人間の本能にインプットされている。これを人の法律の足かせによって行わないのは自然法に反するだろう。殺されようとする人間を救出するなら英雄、救出されるのが動物なら犯罪者、これはつじつまが合うまい。いや理屈はどうでもいい、「ヴルさん、わかった手伝いましょう」と私は口走っていた。

こうして私とヴルは、その夜、養豚場のそばで落ち合うことにした。天気予報では大雨になるとのことだったが、むしろ好都合と思われた。

その深夜、雨の中、レインコートに身を包んだ私は、はがねのワイヤを切るための特殊カッターを持って約束の場所でヴルに会った。彼が言っていたように門には猪が通れるくらいのフラップドアがあり、我々はここを難なく抜けて中に進入した。

豚小屋には蠅や蚊を捕獲するための蛍光灯がいくつか灯っていた。

イノブタたちだけが入っている囲いにゆくと、ブルは言った。

「私はおまえたちのお父さんだ、ここからおまえたちを救い出すために来た。ここに残っていると・・・命が危ないんだ」

私は10頭いたウリボウたちに静かにするようにと行って、カッターで錠のワイヤを切り、扉を開け、彼らを外に出した。あとは門を抜けてひたすら下り坂を走って逃げるだけだ。

ウリボウの救出は万事成功したかに見えた。しかしイノシシは見た、別の囲いで雌ブタたちの乳をむさぼっている生まれたばかりの子豚たちの中にまた新たなウリボウたちが混じっていることを。私はそれに気づいていた。そしてそれを見て見ぬ振りをしていたが、ヴルの視線はその縞の入った子豚たちのほうに釘付けになっていた。

そして「ウーグ」と奇妙な声をあげた。

「おい、そろそろずらからないと犬がやってくるぜ」私は彼をせき立てた。

「犬は顔なじみだ。私を襲わない。あんたはこの子らを連れて先に行ってくれ」イノシシは悲しそうな

目を向けて言った。

「じゃあな」

私は、イノブタたちを従えて、門を通り抜けて、来た道を下り始めた。

そのとき、養豚場の中で大きな音がしベルが鳴り始めた。そして犬が吠え始めた。続いて「泥棒だー」という声が聞こえたかと思うと、場内の明かりが一斉に灯った。私はあわてて走り出した。ウリボウたちも走った。しかし一匹の犬がくさりを切ったらしく我々を追いかけてきた。万事休すだ。私はカッターで応戦する構えに入った。

するとその犬はいきなり「きゃいーん」と哀れな鳴き声をあげた。見るとヴルがその犬を後ろからかみついたらしかった。犬とイノシシの格闘が始まった。

「ひろしさん、私がここで犬たちを止めるから、みんなをつれて逃げてくれ！」ヴルが言った。

ほかの犬も門から出てきた。私は、一目散に坂を駆け下りた、犬たちの悲鳴を後ろに聞きながら。

翌朝、雨が上がって、イノブタたちを連れて森のイノシシの集落にいき、イノシシたちの仲間入りをさせました。しかしヴルはそこにいなかった。かみさんは旦那が帰ってこないのでおろおろしているようだった。

そしてそれ以来私は彼を見かけない。もうすぐ秋になる